

物産会から博覧会へ

— 博物館前史と黎明期を辿る —

金山 喜昭*

はじめに

日本の博物館の成立を知るうえで、近世やそれ以前の事象に起源や類似性をもとめる見解がいろいろと示されている。その一例として、江戸時代の物産会を挙げることができる。例えば、椎名仙卓は物産会と今日の博物館とを比較して、物産会の機能は近代博物館がもつ収集、整理、研究、公開という機能に極めて似ているが、一定の施設がなく、今日の特別展覧会に近いものであると評価している^(註1)。矢島國雄は、物産会を同時代のヨーロッパの私的アカデミーとの同異に着目しつつ、明治初期に創設された博物館は西洋の諸制度や文物と同じように、江戸時代の知の蓄積が生かされたものでないことを指摘する^(註2)。

本稿は、近代国家が博覧会を採用するにあたり、江戸時代の物産会を基盤にした「知の秩序」を、誰が何をどのようにして取捨選択したのかを明らかにすることにより、博物館の成立のあり様を考察することを目的にする。

1. 江戸時代の物産会

本草学と物産会

物産会は、江戸時代に本草を探索することを目的に、仲間内で品物を持ち寄り品評する会であった。本草学の「本草」とは、薬の本となる草（薬草）のことをいい、中国では広く動植物や鉱物などを用いた薬を本草と称した。明の李時珍は、中国の本草学を集大成した『本草綱目』を編纂し、万暦 24 年（1596）

に出版されたとされる。それは、従来の本草書の知識を集め、約 1,900 種の薬用植物、動物、鉱物などについて、その産地、形態、性質、製薬法、薬効などを解説したものである。日本には慶長 12 年（1607）に渡来したとされる。林羅山は、この『本草綱目』を長崎で入手し幕府に献上した。その後、本草学については大きく二つの動向がある。

一つは、本草学者たちの動きである。彼らは、『本草綱目』の和刻を刊行して読解し、注釈書などを出した。国内の産物との照らし合わせも行われた。『本草綱目』に所収された産物は中国産であることから、日本にはないものもある。日本にあってもどれが該当するのか未知のものや、中国にはないが、日本にあるものもある。あるいは、漢名を和名にあてたものや、同じ種類のものでも国内では呼び方が異なるものがある。こうして、中国のものと日本のものを個々に照らし合わせるが行われた。その後、必ずしも薬効にこだわらず、動植物そのものを研究対象にした「博物」にも、次第に関心が向けられるようになった。

もう一つは、幕府による薬種の生産を向上させることや、その普及のために本草学者たちが動員されたことである。江戸時代には長崎貿易を通じて中国からの薬種の輸入が増大したことも一因となり、幕府の財政が悪化していた。幕府や諸藩は財政を再建させるために、薬園を設立することや、薬種を国内調達

*法政大学キャリアデザイン学部 教授

するための調査、大規模な薬草の栽培と生薬の供給などに取り組んだ。これが享保の改革における医療行政となる。

物産会とは

物産会は、このような本草学の動向を背景にして、宝暦7年(1757)、医師・本草学者の田村藍水(1718-1776)が会主となり、江戸湯島で薬草会を開いたことが最初とされる^(註3)。

物産会は、当初、薬種を探索することが主な目的であったことから、薬品会や本草会などともいわれた。とはいえ、薬物以外にも動植物・鉱物など自然物、珍品・奇品などを「無名の異物」として受け入れることにより、未知なるモノの正体を明らかにすることにも関心が向けられた。それらは、「会主」といわれる、多くは本草学者が主催者となり、同好の者たちが薬草をはじめ動植物や鉱物などの自然物を、会主の自宅や寺院、藩の施設などの会場に持ち寄り、モノの鑑定や同定、名称を確認することや、真贋を鑑定することなどが行われた。

宝暦7年の藍水を会主にした最初の物産会には、藍水門下の仲間を中心に21名から約180種が出品された。翌8年の物産会には、出品者は34名となり、出品物も231種に増えている。宝暦9年、藍水に師事した平賀源内(1728-1780)が会主となり湯島で薬草会を開き、翌10年には同門の松田長元が市ヶ谷で薬品会を、さらに宝暦12年、源内は全国から出品物を集めて「東都薬品会」を開いた。

そのほかにも物産会はいろいろと行われたが、江戸以外でも、宝暦10年(1760)、医家の戸田旭山(1696-1769)が大坂で物産会を開いた。京都では儒医で本草学者の山本亡羊が、家塾を開いて医書、本草書、経書を通じて本草学の一般普及に務めるかたわら、文化6年(1809)から約60年間に渡り自邸を会場にして山本読書室物産会を通算50回ほ

ど開いた^(註4)。尾張では、文政10年(1827)、伊藤圭介(1803-1901)により本草会が自宅内の修養堂において行われた。近江、和歌山、福井、富山、熊本など各地でも物産会が行われた^(註5)。そこで、当時の物産会の中でも、いくつか特筆されるものを挙げてみることにする。

戸田旭山による薬草会

宝暦10年、戸田旭山が大坂で催した物産会は1日だけであった。出品者はおよそ100名、出品物の点数は240を超えた。大坂や京都ばかりでなく、江戸や長崎、岡山、明石、讃岐、和歌山などからも出品された。出品者は、各階層の人々が名を連ねているが、江戸の田村藍水、元長父子、松田長元、平賀源内らも参加した。

この物産会は、本来の原則に従い本草(薬品)を品評することを目的にしたものであった。旭山が著した『文会録』(宝暦10年)に所収される「薬品会請啓」には「四方の君子、糞くは寒陋を棄てず、各薬用に充つべき者一二種を携へ、以て来会を賜は幸甚から惟もとむ」^(註6)というように、貴賤の区別なく、それぞれ1・2種の薬用品を持参して会に出席してほしい、となっている。「明月望日を期し、弊園在所の草木数十種を以て同志の士に会し共に明め疑惑を質し眞偽を弁え正さんと欲す」。明るる月の望日に、自分の所(自宅の薬園)にある草木数十種をもって、集まったモノを仲間で互いに意見を交わしながら眞偽を明らかにしたい、という思いが述べられている。また、その「会例」には、出品を希望する方は、草木金石虫魚鳥獸等の薬食に役立つ(薬用)ものを一両(重さ)程持参することや、会席は狭い所なので、三種までの出品にしてほしいということも記されている。

しかし、実際のところ、出品物は薬用以外に、磁石、長石、滑石、石燕(腕足類の化石)、牡蠣、サクラ貝、駝鳥の卵殻、象皮、人魚の

手（サンショウウオノテ）、石弩（石鐵）などもあった。「無名の異物等御家蔵被成候ハゞ何によらず御出し可被成候、衆評の上名も付候へは博物の一と存候」というように、「無名の異物」があれば、どのようなものでも出品してほしい。衆評の上に、名を付ければ博物の一つとすると記されている。物産会は、本草を対象にするものの、「無名の異物」を排除することをしていないことが分かる。

備前岡山の某氏出品による「磁石」については、「衆評に曰く上品なり。漢産と雖もこの者如き尤稀なり」というように、参加者たちの評価によれば、優れたもので、極めて珍しいとしている。日向産の「熊館芝」については和名であるが、「是乃熊館に所生する芝なり。土人取収て積気を治す甚効あり。衆評に曰く其形色気味皆エブリコと同じ是亦朱崖芝を以て名づくべし」と。キノコ的一种で地元の者たちが積気を治す薬効のあることを伝えている。参加者たちは、これについて、その土地で「熊館芝」と呼んでいるものは「エブリコ」と同じもので、中国では「朱崖芝」というものと同じであると評している。このように「衆評何々」と見えるように、出品者たちが品物をお互いに論評して、真贋ばかりでなく、薬効や地元の言い伝え、『本草綱目』に記された中国での呼称と照合していることが知られる。

仁の探求とモノを究理する

本草学者の多くは医家でもあった。医とは薬と一体であったからである。さらに当時の医家は儒学を修めていたことにより、儒医とも呼ばれた。儒教の教えは、生き方の価値観にもなっていた。物産会は、儒教の教えに支えられていたともいえる。

上野益三が指摘するように、『文会録』の「文会」とは『論語』の「曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く」（顔淵第十二）から採ったものであり、仲間を集

めて、その仲間たちによって仁道を増進することを意図したもので、旭山が開いた薬品会とは、仲間たちと品物を品評する「文化の生活」であるという^(註7)。先述したように、旭山自身も「同志の士に会し共に明め疑惑を質し眞偽を弁え正さんと欲す」と記している通りである。

『文会録』冒頭の「文会録縁起」には次のような一文が書かれている。「薬之物ト為ル、上ハ雨露霜雪ヨリ下ノ虫魚草木ニ至ルマテモ用イザル無シ、即今、此ノ会ヲ設クルヤ取エテ仁ヲ輔ルノ謂ニアラズトイエドモ、マタナンゾ吾ガ仁術ニ益アルヤ」。薬となるものには、自然界の全ての産物を用いることができる。物産会を開くことが取えて、孔子が唱えるような仁の道を助けることになるとはいえないだろうが、私の仁術に益するのではないか、と述べている。

孔子によって「仁」が唱えられて以来、多くの学者によって、いろいろな捉え方がなされている。貝原益軒は、『養生訓』で「医は仁術なり、仁愛の心を本とし、人を救ふを以て、志とすべし」と述べている。益軒は、「凡医となる者は、先儒書をよみ、文義に通ずべし。文義通ぜざれば、医書をよむちからなくて、医学なりがたし。又、経伝の義理に通ずれば、医術の義理を知りやすし」^(註8)ともいうように、医家は儒書を読み学ぶことにより良医になると考えていた。医家である旭山にとっても、物産会は、仁を探究する場となっていたといえる。

尾張医学館薬品会

文政10年3月、水谷豊文とその弟子伊藤圭介らの菅百社により、圭介の自宅にある修養堂を会場に薬品会が行われた。これが尾張における物産会の最初であるといわれる。その後、菅百社による本草会は毎年行われた。中でも、豊文の死後に行われた、天保6年(1835)3月の豊文三回忌追善の本草会は、「本草会はまことに名もしれぬ珍しき物数多出る

ゆえ、是を見物の人おびただしく、朝より夕まで、押合へし合して、さすがの広き書院、つめも立ぬ程也」(小田切春江「名陽見聞図絵」)というように盛況であった。

尾張藩奥医師の浅井紫山が中心となった尾張医学館(尾張藩の藩医の養成機関)の薬品会は、毎年1回、定期的に行われた。「尾張名所図会」(天保15年)に付された説明文には、次のように記されている。

毎年六月十日にして、山海の禽獣虫魚、鱗介草木、玉石銅銭等のあらゆる奇品をはじめとして、竺支・西洋・東洋の物産までを一万余種集め、広く諸人にも見る事をゆるし、当日見物の貴賤老弱、隣国近在よりも湊ひて群をなす。

この薬品会は、6月10日に行われたが、国内ばかりでなく海外の文物も集められ、それは広く一般に公開された。会場は、「本草」と「雑品」の二つに区分され、本草は、『本草綱目』の分類に従って展覧されたが、「雑品」の会場は図絵に描かれているように系統的な配列とはなっておらず、特に貴重な木像人骨

は床の間に置かれている。正しくは「木骨」と呼び、大坂の医師奥田万里が文政3年(1820)に細工師池田某に命じて制作し、文政5年に尾張藩に献納されたものであるという。そのほかに床の間には銅像人骨と人参・熊胆囊も展覧されていた^(註9)(図1)。

この薬品会の「雑品目録」に記された雑品は、371品目(出品者61人)である。展覧品は、先述の「木骨」などのほかに、「太素経」、「明堂経」、「唐本草」などの貴重本もある。さらに一例をあげると、貝セキ(貝化石)、木葉イシ(木葉化石)、石蛇(アンモナイト化石)、ツキノフン(巻き貝の化石)、天狗の爪(サメの歯化石)、竜の歯(サイの歯の化石)などの化石、積雪草(ツボクサ)、車前(オオバコ)などの植物、ツバメウオ(トビウオ)、ハリフグ(イシガキフグ)、海牛(ウミスズメ)、貝類(三百六十五品)などの魚介類、石鍾乳(鍾乳石)、パテイセキ(黒曜石)、玉ズイ(玉髓)、雲母などの岩石・鉱物、蜂(オオスズメバチ)、結草蟲(ミノムシ)、天牛(ミヤマカマキリ)などの昆虫、石弩(石鏃)、古瓦、

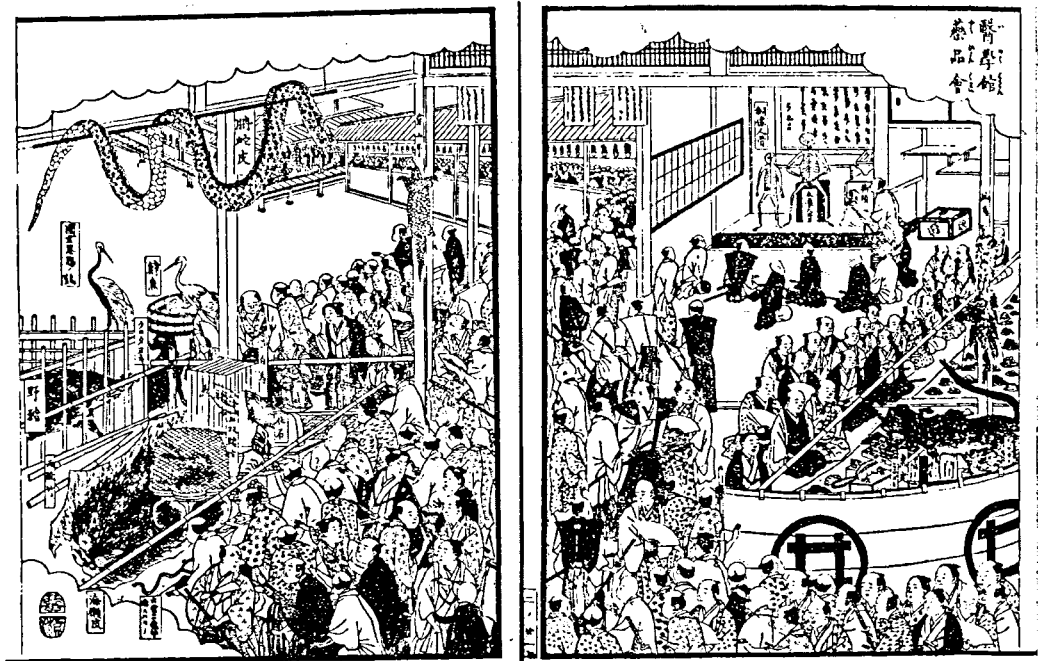


図1 尾張医学館 薬品会(『尾張名所図会』国立国会図書館デジタルコレクションより)

キツ子ノマサカリ（磨製石斧）、マガタマ（勾玉）などの考古資料である（括弧内の名称は現代名）。

このような「雑品目録」からは、「本草」の領域外のモノを「雑品」という仮の領域に括ることにより自然物と人工物を横断的にとらえる「博物」の視点のあったことを知ることができる。そして、木下直之が指摘するように、後述する明治4年（1871）の物産会（博覧会）になると、「雑品」とされた「木骨」や「銅像人骨」は、「内外医科器械之部」という新たなカテゴリーを与えられるようになる。物産会はこのように雑品を常に受け入れたことについて、「既成の知識ではとらえきれないものを理解しようとする精神（これこそが「博物」）によって物産会は支えられてきた」^(註10)といえるのである。

平賀源内と東都薬品会

宝暦12年（1762）閏4月10日、源内が会主になり江戸湯島の京屋九兵衛方で「東都薬品会」が催された。源内は全国から多くの品物を集めるために、ユニークなやり方を考案した。物産会では出品者が品物を持参していたが、参加者が出品しやすくするために、直接に出向かなくても出品できるようにした。そのために、産物請取所（大坂・京）や出張所といえる諸国産物取次所（長崎・近江・摂津・播磨・紀伊・信濃・越中など）を全国各地に設け、そこを経由して品物だけを出品することができるようにした。しかも運搬費は主催者が負担したのである。

源内は、前年10月に引札（広告ちらし）（早稲田大学図書館蔵）を各地の同好の仲間に配布している。この引札の序文を読むと、薬品会の目的を理解することができる。「故に諸国産物未だ尽く出でざるなり。若し尽く出ば則ち漢蛮商舶せいさいの齎載する所を待たずして足らん」（原文漢文）。長崎貿易により、薬用の品物類が多量に輸入されており、そのため日本

の正金銀流出の大きな原因になっている。そのため、「只今まで漢渡のみにて、我国になき品も深山幽谷尋求る時は又なきにしもあらず。しかはあれど道遠き国々を一々尋ねんとするも煩しく、又ことごとく至るへきにもあらざれば、其国々の人にたよりて産する所のものを得て、（中略）大体は外国より渡らずとも日本産物にてこと足りなん。然る時は、内治外療の益少なからずと思ひ立し」（原文漢文）。これまで薬用品は中国から輸入してきたが、我国にはないといわれていた品も人里離れた奥深い山地にあるかもしれない。そうではあるが、遠き各地を訪ね歩くことは困難であることから、各地の人々から産地などの情報を寄せてもらいたい。（中略）おおよそは海外から輸入しなくとも国内で調達ができると思われる。そうすれば、国内経済にとっても益があることだろう、ということである。さらに続けて、「より前々四会七百余種に及び且他国にも此会の催しあるによつて、此度の会は遠国同志の助けを乞ふ」（原文漢文）というように、これまでの薬品会で出品数が七百余種に達したことや、江戸以外の全国各地に同じような催しがあるだろうから、全国の同志からもぜひとも出品をお願いしたい、と記している。

源内は、出品者に対する事前準備も怠りなく、次のように依頼している。「前回に出候物にても産所替り候得は珍敷御座候。何でも御出し可被申口、物産□□所の郡村名或は山沢の名、方言等、又は深山希にある品所在多く産する訳等くわしく御書しるし被遣可被下候」。すなわち、これまでにも物産会に出品した物でも異なる産地のものであれば出していただきたい。どのような物でも積極的に出品してほしい。出品物にはその産地の郡村名や山沢の名など、または、どのような名称で呼ばれているのか方言名、山奥に産する品で多量に産出するのであればその理由などを詳しく書いてほしいというように、出品物に関

する情報提供を依頼している。この引札からは、源内は東都薬品会を殖産興業のために国内資源に関する情報収集と、出品された品物を調べることを目的にしていたことが分かる。

また、出品物は薬物に限定せず、各地の「草木鳥獸魚介昆虫金玉土石和漢蛮書」など幅広いものを対象にしていることも見逃せない。募集の引札の文面には、「産物御出し被成候にハ、草木金石鳥獸魚虫分類、或は無名の異物にても、思召寄に御出シ可被下候」^(註11)のように「無名の異物」に目を向けている。

薬品会の終了後に源内が刊行した『物類品隲』（宝暦13年刊）には、東都薬品会を含め、田村藍水らが会主となった、宝暦7年～12年の5回の物産会に出品された合計2,000余種のうちから、主要なもの360種を選んで、和名を示して産地や解説を加えている。さらに、出品物を水部、土部、金部、玉部、石部、草部、穀部、菜部、果部、木部、蟲部、鱗部、介部、獸部の14部に分類してカタログ化している。また、重複するものや、「論當未核者」（論當未だ核せざる者）というように、不明品については掲載を見送っている^(註12)。

14の部は、人工物と自然物を横断しており、しかも<土部>には、陶土や陶石、松煙、石炭などのように、同じ部内でも自然物と人工物が混在している。また、穀部や菜部、果部のように人間生活に役立つモノと、草部や蟲部、獸部のように自然界を構成するモノのように、その基準は一樣ではない。本来、分類とは、共通性をもつモノ同士を、ある種の意義や基準の下で比較することにより、カテゴリー(分類)分けをするものである。しかし、源内による分類は、そのようなカテゴリー分けが成立する以前の形態のようにみえる。なぜなら、博物学や殖産興業のための物産学という複合する視座をもち、モノに名称を付けて区別することにより、分類の意味づけを問い直していたように思われるからである。上野益三が源内や『物類品隲』について、「源

内の本草学は正に博物学である」^(註13)と指摘する通りである。

2. 物産会から博覧会へ

江戸時代の物産会は明治時代になると、どのようにして引き継がれたのだろうか。日本の博物館の誕生を解き明かすヒントの一つが、そこに隠されているのではないかと思われる。江戸時代の本草学や博物学は近代化の枠組みの中に取り込まれて、あるものは生かされるが、あるものは排除される。またあるものは変質化していくことになる。本草学は、本来の薬用植物の調査研究から、自然界を構成する動植物や鉱物などに関心が向けられるようになってから、博物学と呼ぶべきものに変ったが、一方では殖産興業を意識した物産学となり、明治時代に入ると物産学そのものが殖産興業と一体化していくことになる。

大学南校の物産会

明治になっても民衆が主催する物産会は存続する^(註14)が、新たに国家が「モノを集める」物産会(博覧会)が行われるようになった。

大学南校の物産会は、明治4年5月14日から7日間にわたり、東京・九段の招魂社(現・靖国神社)で開かれた。その主意は、「博覧会ノ主意ハ宇内ノ産物ヲ一場ニ蒐集シテ其名称ヲ正シ其ノ有用ヲ弁シ或ハ以テ博識ノ資トナシ或ハ以テ證徴ノ用ニ供シ人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ寡聞固陋ノ弊ヲ除カントスルニ在リ」^(註15)となっている。博覧会となっているが、開会時には物産会に名称を変更している。これは江戸時代の物産会を「其名称ヲ正シ其ノ有用ヲ弁シ或ハ以テ博識ノ資トナシ」として踏襲している。しかし、この物産会(博覧会)は国家が主催する、「人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ寡聞固陋ノ弊ヲ除カントスル」というように民衆教育の場となった。

しかし、政府には、まだ出品物が不足していたことから、「当今官品未タ完足セス故ニ

金石ノ属草木ノ類ヨリ鳥獸魚介虫豺等ニイタル迄総テ天造ニ属セシ物又諸器械奇品古物及ヒ漢洋舶齊ノ諸品等総テ博識ノ資トナスヘキ人造ノ物ヲ所蔵シ展観ニ供セント欲スル有志ノ輩ハ会前ニ之ヲ当館ニ携へ来ルヘシ且ツ最寄ノ物品ヲ出セシ輩ニハ褒賞ヲ賜フヘキ事」^(註16) といよように、広く一般にも出品を呼びかけて、出品物を寄せた者には褒美を与えるとした。こうした出品物の集め方は、江戸時代の物産会でもみられた手法であるが、褒美を与えるところは国家主催のある種の意図を垣間見ることができる。実際、出品に協力したのは、以前から物産会に馴染みの政府関係者達が多く、集まった出品物は総数 2,347 件であった^(註17)。

その内訳をみると、「政府(大学南校物産局)の所有品である「官品」はわずかに四六二件、これに工部省出品の一件を加えても全体の二割弱に過ぎない。残りの八割はすべて個人の出品物で賄われている」^(註18)。その個人とは、主催する立場にあった物産局の田中芳男をはじめ伊藤圭介、竹本要斎、内田正雄など 40 名であった。出品物のあり方に注目すると、「七五二件の圧倒的な数を誇る田中芳男は「会主」に相当するだろう。田中の師にあたる伊藤圭介は、自分の収集品を万遍なく出品するのではなく、鉱物の出品に重点を置いて、鉱物、植物、動物の三部門の間の均等を図っている。この意味で伊藤は弟子の「後見」役にまわったといえそうだ」^(註19)、と鈴木廣之が指摘するように、江戸時代の物産会と同じように、主催者の「会主」とその役回りの構図が見えてくる。

また、出品物の分類には、江戸時代の物産会と同じように、「雑之部」が設けられたが、そこには舶載品を中心とする諸物が記されている。一方では木下直之が指摘するように、動植物などの自然物を主体とし、「古物之部」の古器旧物などの歴史遺物は脇役に押しやられ、新たに注目すべき物品として、「測量究

理器械之部」や「内外医科器械之部」が独立した項目として出品目録に掲載されるようになった。前者は測量家望遠鏡・摩擦エレキ・地球衛星運轉雛形など 13 件、後者は人身内景模造・眼球や胎児などの模造・解剖器械・顕微鏡・男女頭骨・西洋人頭骨など 22 件。「器械は、物産会の新顔としてその枠組みを広げさえすれば、破壊するものではなかった。むしろ、明治時代初期の博覧会や博物館において、もっとも正統的な展示物だったといえるかもしれない」^(註20) といよように、器械類が殖産興業の推進役の一部を担っていく。

主催者側は、来場者を動員するための仕掛けを忘れなかった。それは、江戸時代の見世界的な発想をうまく活用することにあつた。まず、招魂社の祭礼日に会期を重ねたことである。会場となった招魂社は戊辰戦争の官軍の戦死者を祭るために、明治政府が設置したものである。5月15日は上野の戦い、同月18日は箱館の降伏による祭礼日となっている。5月14日から7日間の会期は両方にまたがることから、「五月一五日と一八日は接近していたから連日花火あり競馬ありで、こちらも“群集ある事夥し” かつたはずだ」^(註21) ともいわれる。

この物産会(博覧会)は、江戸時代以来の物産会の延長線上にあるものとはいえ、明らかに近代化を意識した国家事業として登場することになった。

文部省博覧会

翌年の明治5年(1872)3月10日から4月30日、文部省が主催する博覧会が東京・湯島聖堂を会場に行われた。明治4年7月に大学が廃止されて文部省となると、大学南校は文部省の直轄となり「南校」と称された。それに伴い、文部省に博物館が置かれ博覧会の事務を担当することになった。この博覧会は、前年の大学南校の物産会(博覧会)で示されたように、毎年博覧会を開いて物産につ

いての知識の啓発をはかる民衆を教育する方針を引き継ぐものであり、前年の物産会（博覧会）に比べて、次のような特徴がある。

まずは、前年の物産会の主意に加えて、その布達には「就中古器旧物ニ至テハ時世ノ推選制度ノ沿革ヲ追徴ス可キ要物ナルニ因リ嚮者御布告ノ意ニ原ツキ周ク之ヲ羅列シテ世人ノ放観ニ供セント欲ス」^(註22) というように、古器旧物の保護の普及を意図した。この「御布告」とは、廃仏毀釈から古器旧物を保護するために、前年の明治4年5月に太政官から出された「古器旧物保存方」のことをいう。

そのため出品物は、「出品目録草稿」^(註23)によると、御物をはじめ水戸徳川家からの献納品、古代遺物・書画・銅製品・武器武具・調度品・日用雑器・楽器・衣服衣装などの古器旧物類や鉱物や化石などの天産物など、およそ600点を数えた。大半の出品物が古器旧物となっていることは、「古器旧物保存方」布告を目に見える形で普及する場にしようという思惑があったからである。博覧会の出品物は物産会のときの「古物之部」に当たるものが圧倒的に多く、やはり官品は僅かで主催者の関係者を含めて個人からの出品物が多かったことから、「今度は、古物中心の町田久成と蝸川式胤がいわば会主になった形」^(註24) というように、やはり江戸時代の物産会の役回りを踏襲していた。

とはいえ、一定数の自然物も出品された。博覧会を報じた「古今珍物集覧」（一曜斎国輝筆）には、棚ごとに鳥類や魚介類、爬虫類、哺乳類のように、生物学上の分類基準により棚分けがされている^(註25)。「博覧会諸人群衆之図」（昇斎一景筆）でも大勢の見物人が大成殿内で魚や鳥類の剥製や植物標本や、回廊では群衆が鶴や獣を見物している様子が描かれている。

この博覧会に対する世間の反響はどうだったのだろうか。博覧会の会期は、当初3月10日から20日間を予定していたが、好評に

より4月30日まで延期した。一般公開は48日間で総入場者数は192,878人（1日平均約4,000人）と盛況であった^(註26)。民衆は戸惑いながらも好奇のまなざしをもって来場した様子を当時の錦絵から知ることができる。「元昌平坂博覧会」（昇斎一景筆）に描かれているように、木枠にガラス板を嵌めたケースに収められた金鯉を見て驚き腰をぬかす人たちの姿は民衆の驚きを表している。あるいは「博覧会諸人群衆之図」のように、大成殿内では陳列ケースをのぞき込む黒山の人だかりの様子は物見遊山である。

前年の大学南校の物産会（博覧会）と同じように、この博覧会も江戸時代の物産会の延長線上にあるとはいえ、出品物をガラス越しに見せるということは、鈴木廣之が指摘するように「視覚優位の視線」が生まれるようになったことを意味する。江戸時代の見世物の口上を排除するように、「視覚の優位」は、聴覚などの感覚を抑制して、展示ケースに嵌められたガラス板によって、見ることに集中させる機能を引き立てるようになったといえる^(註27)。

博覧会終了後は、旧湯島聖堂の大成殿は、博覧会終了後の明治5年5月6日から、毎月1と6のつく日（官吏の休日）に一般公開（「一・六の公開」と呼ばれる）する文部省博物館として開館することになった。今日の東京国立博物館は、この文部省博物館の開館をもって創立時としている^(註28)。

3. 黎明期の博物館

ウィーン万国博覧会への参加

ところが、文部省博覧会を準備していた明治5年1月、太政官正院内に「澳国博覧会事務局」が設置された。そのため博覧会を主催する文部省博物局は、明治6年（1873）にオーストリアのウィーン万国博覧会に参加するための準備も並行し行うことになり、文部大丞田中久成と編輯権助田中芳男が御用掛

となり、その準備を担当することになった。しかし、それは文部省が主催する博覧会のように、古器旧物を保護する主意とは異質のものであった。

明治5年6月、澳国博覧会理事官の佐野常民(1822-1902)が太政官正院に上申した意見書^(註29)によれば、「御国天産人造物ヲ採集選撰シ、其図説ヲ可要モノハ之ヲ述作シ、諸列品可成丈精良ヲ尽シ、国土ノ豊穡ト人工之巧妙ヲ以テ、御国ノ誉榮ヲ海外へ揚候様深ク注意可致事」というように、ウィーン万博への参加は日本国内の自然物や人工物の精良な物を出品することにより、「誉榮」を海外に示すことを第一に挙げている。さらに、各国の風土物産や学芸を知ることや、機械の工術を伝習すること、またウィーン万国博覧会から博物館や博覧会を開催する基礎を学ぶこと、博覧会に出品した日本の品物が賞賛を得れば輸出を増加させることができることを挙げている。日本を近代化させて西欧諸国と対等に渡り合うために、国の威信を誇示しつつ、国力をつけることを目的にするものであった。

明治5年10月には、大隈重信が博覧会総裁、佐野常民が副総裁となるが、佐野が実務を掌握する形で政府はウィーン万博に参加した。ところが明治6年3月、太政官は文部省博物館を書籍館、博物館局、小石川薬園とともに太政官正院の博覧会事務局に、吸収合併した。この合併の理由について、椎名仙卓は明治政府の心臓である「正院」が中心となって博覧会を開くことにより、明治新政府の“権威”を示したいと考えたからではないか、と指摘する。この博覧会とは、文部省博覧会に続き、太政官正院が主催する博覧会のことを意味している^(註30)。翌月、博覧会事務局は、江戸城門の一つの「山下門」から城内に入った、旧中津藩邸などの建物の一部を利用して「山下門内博物館」(山下町の博物館等とも呼ばれる)と称し、博覧会事務局が主催する博

覧会を実施した。こうして湯島聖堂構内の文部省博物館は、1年経たずして「山下門内博物館」と名称を変更し、博覧会事務局が所管することになった。

一方、佐野常民は、ウィーン万博から帰国後の明治8年(1875)5月、太政官正院に『澳国博覧会報告書』^(註31)を提出した。そこには、内務卿大久保利通によって方向づけられた殖産興業に対する具体的な方策が述べられている。そのなかの「博物館部」には、佐野の博物館についての考え方が次のように記されている。「博物館ノ主旨ハ眼目ノ教ニヨリテ人ノ智巧技芸ヲ開進セシムルニ在リ夫人心ノ事物ニ触レ其感動識別ヲ生ズルハ眼視ノ力ニ由ル者多ク且大ナリト夫ノ言語相異ナリ人ノ情意相通ゼザル者モ手様ヲ以テスレバ其大概ヲ解知スベク者ノ妍媸美醜ヲ別ツテ愛憎好悪ノ情ヲ発スルト其形質体状ニヨリテ製式用法ヲ了解スルト^{ひとし}齊ク眼視ノ力ニ頼ラザルナシ古人云フアリ、百聞一見ニ如カズト人智ヲ開キ工芸ヲ進マシムルノ最捷^{しやうがい}径最易方ハ此眼目ノ教ニ在ルノミ。

佐野は、冒頭、博物館には「眼目ノ教」により「人ノ智巧技芸ヲ開進セシムル」ことができるというように、博物館がもつ視覚による教育的特性を見抜いている。「眼視ノ力」は、事物の良し悪し、美醜を識別し、形や構造から製法や用途を理解することができる。

さらに佐野は同報告書で、「夫博覧会ハ博物館トソノ主旨ヲ同クスルモノニ実ニ国家富殖ノ源人物開明ノ基トス之ヲ要スルニ大博覧会ハ博物館ヲ拡充拓張シ之ヲ一時ニ施行スルニ過キス故ニ常ニ相須テ相離レサルモノタリ」という。佐野が述べている博物館とは、博覧会とほぼ同じ意味であることが分かる。ただし、博物館は小規模で常設であるのに対して、博覧会は規模が大きく一時に設置するところが異なるという捉え方をしている。いづれにしても、「眼目ノ教」や「眼視ノ力」、

そして「百聞一見ニ如カズ」ともいうように、佐野は博物館や博覧会に視覚教育の場となる意義を見出しているのである。

石井研堂も、『明治事物起源』(明治41年刊)で博覧会と博物館のはじまりについて「開設の祖をなせる聖堂の博覧会は、古来本草家の間に行はれし、骨董会本草会の、ただ規模の大なりしのみならず、文部省の主催にかかり、博物館色も濃かりしなり」^(註32)としているが、ここでいうところの「博物館色」とは、「本邦の博物館は、博覧会と同身一体の発展なり」^(註33)というように、殖産興業などを意図する博覧会とほとんど同じ意味で理解している。

さらに、佐野は同報告で博覧会の実益を「内外の物品ヲ比較シ互ニ其得失良否ヲ察シ諸工ヲシテ準式スル所アリテ短ヲ捨テ長ヲ取り旧ヲ変シテ新ニ換ヘ陋ヲ去リ美ニ就キ激励競進シテ止マス其術ヲ琢磨シ其製ヲ錬熟シ以テ国家ノ利源ニ資益スル」というように、そこには日本が近代化するために博物館や博覧会を、殖産興業に関する国内外の品物を比較することで改良するために競い合い、そのために技術を向上させるための社会的な装置にする意図を見ることができる。

さらに、佐野が上申したウィーン万博に参加する目的の一つにもあげたように、将来の博物館や博覧会の基礎を学ぶという目的とその知見は、明治10年(1877)8月の内国勸業博覧会に生かされることになる。

内国勸業博覧会

第1回内国勸業博覧会は、同年8月21日～11月30日の102日間、東京・上野公園内を会場(約10万平方メートル)にして行われた。会場には、東本館、西本館、美術館、機械館、農業館、園芸館、動物館が建てられた。それらは「鉱業及び冶金術」「製造物」「美術」「機械」「農業」「園芸」に区分けされ、出品者は官庁(勸商局、地理局、衛生局、文部省、

博物局、開拓使、海軍省など)のほかにも、全国府県から企業や個人からの出品物が、素材・製法・品質・調整・効用・価値・価格などの基準で審査され、優秀者に賞牌・褒状等が授与された。会期中の来場者数は45万4千人にのぼった。

主催者(内国勸業博覧会事務局)は、あらかじめ“観覧者の心得”を、次のように示している。「内国勸業博覧会の本旨たる工芸の進歩を助け物産貿易の利源を開かしむるにあり徒に戯玩の場を設けて遊覧の具となすにあらざるなり」^(註34)。このように、内国勸業博覧会事務局は博覧会を見物する民衆に対して、物見遊山で見物することを戒めている。当時の新聞の論調も同じであった。工芸の進歩や物産貿易による殖産興業を推進する教育のための博覧会の役割が強調された。

博覧会は、全国から品物を一堂に集めることにより、その優劣を比較する実験の場となった。佐野らが、ウィーン万博などから学んだ“競い合う原理”を導入したものである。主催者は、その比較の要点を「品物の精粗をよく見極めること」「製造の巧拙を判断する。殊に海外輸出の要品である陶磁器、漆器、銅器などには着眼すること」「所用や作用の便利さをみる」「価格に留意すること」^(註35)と説明している。この要点は、出品物を審査する留意点と重なるが、来場者に対しても審査官と同じ視線で見学するよう、民衆に「眼視の教」を課すものとなった。こうして、博覧会が民衆教化の装置と見做されることになったことや、博物館や博覧会は「眼視の力」の空間となり、多数のモノを比較することにより、人々は秩序づけられた空間を巡覧することで知らず知らずに「眼視の教」によってモノ自体を学んでいく場となった^(註36)。

その一方、博覧会の出品者に対して博覧会事務局から出された『明治十年内国勸業博覧会出品者心得』という小冊子には、「珍敷品物たりとも都てかたわらの鳥獣虫魚又は古代

の瓦曲玉書畫等の類は此会に出すへからず。先律出品の大概は人々の必用の物にて追々繁盛に致度き見込みあるもの（以下略）」というように、物産会の主役であった「無名の異物」（珍敷品物）が排除され、必用な品物のみを出品の対象物とした。鈴木廣之が指摘するように、「出品を拒まれた“珍敷品物”は“人々の必用の物”と反対の、いわば不用の物を指す。ここでは物の世界が“人々の必用の物”とそうでないものとに分かれる。この二つを分ける基準がすなわち物どうしの間の優劣を判定する物差しになる」^(註 37) というように、内国勸業博覧会が対象とする物は、総て「人々の必用の物」とされるようになったのである^(註 38)。

パラダイムの転換

明治4年の大学南校の物産会（博覧会）でも江戸時代の物産会の分類に見られたように、「雑之部」がまだ残されていた^(註 39)。先述した尾張医学館の薬品会のように、『本草綱目』とそれに掲載される薬草類を分類基準にして、それに属さないモノは全て「雑品」のように一括りにされていた。江戸時代の物産会は、「モノの探求」のための一定の基準に属さないものや不明品、「珍敷品物」などの「無用の異物」等を「雑品」として、とりあえず仮に一括りしておき、時期をみて分類を更新していた。それは、新たな価値観を創出するための予備的な措置といえるものであった。

ところが、その後、佐野と共にウィーン万博に派遣されたドクトル・ワグネルが政府に提出した「東京博物館創立ノ報告」（明治8年）に示されるように、博物館の列品分類から「雑品」は姿を消すことになった。それは殖産興業にとって「人々の必用の物」を体系的に分類した一覧であった。明治8年3月、太政官正院の博覧会事務局が博物館と改称し内務省の所属となると、山下門内博物館の列品分類（明治8年10月）からも、同じよう

に「雑品」は姿を消すことになった。

江戸時代の物産会は、人工物や自然物ばかりでなく「無名の異物」を排除することなくすべてを包摂していた。今日の分類法からすれば、無秩序に見えるかもしれないが、そこには「モノを探求」と知の体系化をはかるために、ある種の「混沌とした秩序」が成り立っていたといえる。それは、大学南校の物産会（博覧会）や文部省博覧会にも引き継がれたが、ウィーン万博への参加を契機として、「人々の有用な物」を選択するために「整然とした秩序」に置き換えられることになった。博覧会と同義にみなされた博物館も役に立たない「無名の異物」を排除し、「人々の有用な物」を取り扱うことになった。

こうして、医や儒教の教えも手伝い、モノに対する好奇心と探求心に支えられた江戸時代からの物産会は、明治時代になり近代国家の形成をめざす政府の意向によって、ほぼ同義ではあるが、規模が大きく一時に設置するイベントである博覧会と小規模ながら常設の施設である博物館となり、殖産興業のための国家事業に組み込まれ、民衆を教育する社会的装置となっていく。ここに博物館の黎明期の一断面を見ることができる。

註

註1：椎名仙卓 2000『図解博物館史』雄山閣出版、p32-40

註2：矢島國雄 2010「我が国の博物館創設事情をめぐって」Museum study 22、p.1-22

註3：城福勇は、著書（城福勇 1971『平賀源内』吉川弘文館）の中で、「天曆七年（一七五七）、わが国最初の薬品会＝物産会が田村元雄（藍水）の主催によって江戸湯島で開かれるが、それを最初に発案したのは源内であった」と述べている。それを確認するために、『物類品隣』（国立国会図書館所蔵『物類品隣 6巻』請求記号特1-4）にあたってみると、「物類品隣序」に田村藍水が、「同志中平賀氏先ず唱え相續いて松田氏力を戮せ

先後四五会して止む」(原文漢文)と記している。
すなわち、粟品会を催した発端は平賀源内が唱えたことにあり、同じ藍水門下の松田長元も協力して物産会を四・五回行ったということが知られる。

註4: 遠藤正治 1985 「読書室物産会について」『実学史研究Ⅱ』p.33-84、思文閣出版

註5: 磯野直秀 2001 「粟品会・物産会年表(増訂版)」慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No.29

註6: 戸田旭山 1982 「文會録」『博物学短篇集(下)』恒和出版

註7: 上野益三 1982 「解説」『博物学短篇集(下)』恒和出版

註8: 貝原益軒 1961 『養生訓・和俗童子訓』(石川謙校訂) 岩波文庫 p.125

註9: 名古屋市博物館 1993 『再現江戸時代の博覧会 よみがえる尾張医学館粟品会』

註10: 木下直之 1997 「大学南校物産会について」『学問のアルケオロジー』東京大学、p.92

註11: 註10と同じ。p.91

註12: 平賀国倫編輯「物類品隣」凡例『覆刻 日本古典全集』昭和53年、現代思潮社

註13: 上野益三 1991 「平賀源内」『博物学者列伝』八坂書房、p.47-55

註14: 田中芳男『摺拾帖』(東京大学付属図書館蔵)に貼られた明治時代の物産会のチラシからその様子を知ることができる。

註15: 東京国立博物館編 1973 「弁官宛大学南校上申」明治四年三月『東京国立博物館百年史(資料編)』東京国立博物館、p.572

註16: 註15と同じ。

註17: 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史(資料編)』東京国立博物館、p.574-604

註18: 鈴木廣之 2003 『好古家たちの19世紀』吉川弘文館、p.121

註19: 註18と同じ。p.126

註20: 註10と同じ。p.93

註21: 註10と同じ。p.86

註22: 東京国立博物館編 1973 「文部省布達」番外二月十四日『東京国立博物館百年史(資料編)』東京国立博物館、p.147-150

註23: 東京国立博物館編 1973 「明治五年博覧会出品目録草稿」『東京国立博物館百年史(資料集)』東京国立博物館、p.150-160

註24: 註18と同じ。p.163

註25: 古屋貴子 2004 「開化錦絵から読む湯島聖堂博覧会」文化資源学3、p.65

註26: 椎名仙卓 1989 『明治博物館事始め』思文閣出版、p.63-65

註27: 註18と同じ。p.113

註28: 椎名仙卓 2005 『日本博物館成立史』雄山閣、p.128-129

註29: 東京国立博物館 1973 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、p.70-71

註30: 註28と同じ。p.152-153

註31: 社団法人日本博物館協会編 1964 『昭和38年度 わが国の近代博物館施設発達資料の集成とその研究(明治編1)』社団法人日本博物館協会、p.135-138

註32: 石井研堂 1997 『明治事物起源』6、ちくま学芸文庫、p.303

註33: 石井研堂 1997 『明治事物起源』4、ちくま学芸文庫、p.324

註34: 内国勸業博覧会事務局 1877 『内国勸業博覧会場案内』p.1

註35: 註34と同じ。p.2-4

註36: 吉見俊哉 1992 『博覧会の政治学』中公新書、p.119-121

註37: 註18と同じ。p.115

註38: 鈴木廣之の指摘によれば、「有用品」とは、殖産興業ばかりでなく、古器旧物保護についていえば、「古器旧物保存ノ布告」に示された「古今時勢之変遷、制度風俗之沿革ヲ考証」するために古器旧物が「有用品」ともなるように、価値の置き方によって、「有用品」は規定される。

註18と同じ、p.116-117

註39: 註29と同じ。p.32

謝辞: 本稿を執筆するにあたり、小町大和、菅原真悟、寺内健太郎の各氏よりご協力いただいたことに感謝します。

From *Bussan-e* to Exposition —Tracking Japanese Pre-museum Era and its Early Days

KANAYAMA Yoshiaki

Bussan-e, in Edo period, was a group of highbrows who brought their collections for the purpose of searching medicines. Other than medicines, natural things such as animals, plants and minerals, including strange and curious pieces, were accepted as “anonymous extraneous items”, and gradually people became interested in finding out the identity of such unknown materials. At *Bussan-e*, those “anonymous extraneous items” are first categorized as *Zatsu-no-bu* (miscellaneous category), then the categorization was added and updated to fulfill those newly introduced items, which was the recombination of knowledge and of the “material world”. In 1871 (Meiji 4th), the category *Zatsu-no-bu* was still used in *Daigaku Nanko*, leftover of the *Bussan-e* of previous period.

However, after Japanese government attended the Vienna International Exposition in 1873 (Meiji 6th), resident Tsunetami Sano considered Expo as the same sense as museums, reported that the role of the Japanese museum should be the social mechanism which encourages new industries to modernize the country. Therefore, the categorization of the Yamasita-mon-nai museum of the Home Ministry changed, focusing on items beneficial for the encouragement of the new industries, which means the extinguishment of the *Zatsu-no-bu*.

Thus, *Bussan-e* in Edo period which was backed up by the curiosity and the spirit of inquiry among items in Meiji period integrated into the museums as the national project by the government’s intention, which aimed to build a modernized country. The role of the museums became the mechanism for the education of common people, here we see an aspect of the early days of the museums in Japan.